

菊川町埋蔵文化財調査報告書第48集

にし のき
西 軒 遺 跡

1997

静岡県菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財調査報告書第48集

にし のき
西 軒 遺 跡

1997

静岡県菊川町教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡菊川町土橋433-1ほかに所在する西軒遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査を行なうに至った原因は、周知の遺跡において農道開設工事が計画されたためである。調査に要した費用は、静岡県中遠農林事務所が総事業費の72.5%を、町が27.5%を負担した。この委託契約は「8県は横地内田地区調査委託その5」である。
3. 発掘調査（本調査）は、静岡県中遠農林事務所所長 勝山建郎を委託者とし、これを請け菊川町教育委員会が実施した。
4. 期間は平成8年9月24日から12月12日で、調査面積は1600㎡である。
5. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	菊川町教育委員会			
調査員	後藤 和風（菊川町教育委員会）			
作業員	小林 好子	杉田 くめ	杉田 孝江	杉山 花江
	戸田 和子	野中 秋子	水島まさ江	丸尾 安代
	長谷山寅男	服部喜三郎	山川加知夫	
整理員	神田 清乃	斉藤 京子	杉山 花江	中川由美子
	水島まさ江	水谷由美子	長谷山敏男	谷口 孝子
	丸尾 安代			

6. 本書の執筆と編集は後藤和風が行なった。
7. 遺物整理及び実測図・挿図作成には中川由美子、萩原紀江の協力を得た。トレースは、中日本航空株式会社に委託した。遺構・遺物写真は、後藤が撮影した。
8. 現地調査と本書発刊に関する事務は、菊川町教育委員会生涯学習課が行なった。

平成8年度		平成9年度	
教 育 長	鈴木 静 夫		鈴木 静 夫
事務局長兼課長	横 山 守 孝		落 合 偉 之
文化振興係係長	石 川 睦 美	学術文化係係長	石 川 睦 美
担 当 者	後 藤 和 風		後 藤 和 風
事 務 員	青 木 正 子		丸 尾 淳 子
臨 時 事 務 員	西 野 洋 子		大 関 やすよ

9. 実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。
10. グリッド配置図で記した座標値は平面直角座標系Ⅷによる。遺構実測図における方位はこの座標北を表わす。
11. 遺物の実測図・拓影の縮尺は、原則として3分の1である。

目 次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査の経過および方法	3
第Ⅱ章	地理的・歴史的環境	5
第Ⅲ章	調査の概要	
第1節	層位	7
第2節	遺構と遺物	9
	古墳時代	12
	奈良時代・中世	12
	近世	16
第3節	その他の出土遺物	16
第Ⅳ章	まとめ	26

挿 図 目 次

第1図	位置図 (1 : 2,500)	1
第2図	グリッド配置図 (1 : 800)	2
第3図	遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 10,000)	6
第4図	土層図 (西調査区東壁 1 : 40)	7
第5図	全体図 (1 : 300)	9
第6図	SK-1・2・5・6実測図 (1 : 40)	11
第7図	水田-1実測図 (1 : 50)	14
第8図	出土遺物1 (SK-6・2・5出土遺物)	15
第9図	出土遺物2 (SK-1、水田-1・2出土遺物)	17
第10図	出土遺物3 (その他の出土遺物：土師器)	18
第11図	出土遺物4 (その他の出土遺物：土師器)	19
第12図	出土遺物5 (その他の出土遺物：土師器)	20
第13図	出土遺物6 (その他の出土遺物：土師器)	21
第14図	出土遺物7 (その他の出土遺物：土師器)	22
第15図	出土遺物8 (その他の出土遺物：須恵器、灰釉陶器)	23
第16図	出土遺物9 (その他の出土遺物：灰釉陶器、山茶碗、陶器、瓦)	24

挿 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	5
第2表	検出面別遺構名一覧表	8
第3表	遺物計測表1（遺構出土の土器類、その他の遺物：土師器）	28
第4表	遺物計測表2（その他の遺物：土師器、須恵器）	29
第5表	遺物計測表3（その他の遺物：土器類、遺構出土の土器以外の遺物）	30

図 版 目 次

図版1	西区第1面完掘状態	SK-6完掘状態
図版2	東区完掘状態	SD-4土層断面
図版3	SK-1完掘状態	SK-2完掘状態
図版4	出土遺物（土師器）	
図版5	出土遺物（土師器）	
図版6	出土遺物（上・中：須恵器蓋坏、下：須恵器、灰釉陶器、山茶碗類）	
図版7	出土遺物（上：山茶碗碗、中：瀬戸・美濃、常滑、渥美、志戸呂焼、瓦） （下：刀子、土師器、須恵器）	
図版8	出土遺物（土師器、須恵器）	
図版9	出土遺物（土師器、須恵器、灰釉陶器）	

報告書抄録

ふりがな 書名	にしらのせいせきほくし 西軒遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	菊川町埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	後藤和風							
編集機関	菊川町教育委員会							
所在地	〒439 静岡県小笠郡菊川町堀之内61 Ⅱ 0537-35-0925							
発行年月日	西暦 1997年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				m ²	
にしらのせいせき 西軒遺跡	せいのせきほくし 小笠郡菊川町 つるはし 土橋	22446	228	34度 43分 14秒	138度 5分 25秒	19960924 ～ 19961212	1600	農道開設 工事に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西軒遺跡	集落跡	古墳	土坑	1基	土師器		古墳時代、奈良時代～中世、近世に営まれた複合遺跡である。	
			小穴・柱穴	2基				
		奈良中世	土坑	1基	須恵器			
			水田遺構	2本	山茶碗			
		近世	溝	4本	山茶碗			
		溝	2本					

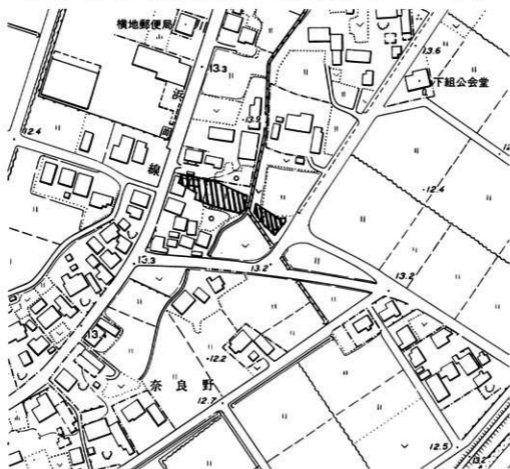
第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過

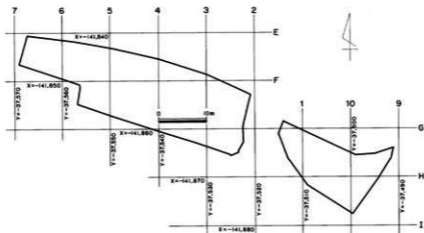
横地地区は菊川町の最も南に位置する。東の牧之原台地から段丘が伸び、この段丘裾に沖積平野が広がる。こうした地形背景にあって段丘上には茶園が、沖積平野には水田が広がる農業地域として知られる。このため同地には、生産性向上と経営規模の拡大による農業構造の改善を目的としたほ場整備事業が継続的に行なわれている。

東横地の奥横地にある横地城跡は古くから知られ、昭和46年に静岡県の史跡に指定された。近年、横地城跡総合調査委員会が設置され新たな学術的成果が期待される。貴重な文化財の宝庫として認められ、町内では潮海寺地区の潮海寺門前町遺跡、内田地区の高田大屋敷遺跡に並び称せられる（菊川町教育委員会 1993・1995、原秀三郎 1997）。

西軒遺跡は、西横地の南部、自治会名では土橋と東横地の下組にまたがる位置にあ



第1図 位置図（縮尺1：2,500）



第2図 グリッド配置図(縮尺1:800)

り奈良野の北に接する。近年まで「菊川町遺跡地図」に登録されていない未周知の遺跡であった。しかし、横地地区に残る数々の伝承や地名、すでに確認されている周辺遺跡や地形環境から埋蔵文化財(遺跡)の存在は十分予想された。

平成7年8月28・29日に菊川町防火水槽強化工事に伴い、遺跡の有無の確認調査が行なわれた。その結果、27㎡の調査面積からコンテナ1箱程度の土器が出土した。以後当該地は「西軒遺跡」として登録された(菊川町教育委員会1996)。

平成7年に静岡県中遠農林事務所から遺跡の有無の照会があった。当該地には場整備事業の一環としての道路開設工事を計画したからである。しかし開発計画地内には遺跡が存在し、その一部が破壊されるおそれがあった。そこで同所と菊川町教育委員会で協議し、工事着手前に発掘調査を実施して記録保存することで合意を得た。同所は菊川町教員会に平成7年10月23日付けで確認調査を依頼した。

その結果、当該地にも西軒遺跡が広がることが明らかになった。これを受け、同所は菊川町教育委員会に平成8年7月5日付けで発掘調査(本調査)の調査費用についての見積りを依頼した。これを元に発掘調査のための費用・期間・体制について再度協議した。

そして、菊川町教育委員会が調査主体となり、調査費用は開発側の同所で全額負担することで合意を得た。同年8月22日に事業者の静岡県中遠農林事務所長勝山建郎と菊川町教育委員会との間で、発掘調査の委託契約書が取り交わされた。

またこの間、同所は菊川町教育委員会に同年9月9日付けで文化庁長官あてに文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。同日付けで菊川町教育委員会は98条の2第1項の規定による発掘調査の通知を提出した。

現地調査は9月24日から入った。機械で表土と耕作土を除去し、順次人力により行なった。不安定な天候に空測日程が左右されるなどしたが、同年12月12日におよそ2ヶ月半の現地調査を終了した。

第2節 調査の経過及び方法

経 過

事前調査

平成8年9月23日 調査範囲の確認等を行なう。

本調査の開始

9月24日～10月1日 バックフォアで東調査区の表土剥ぎを行なう。

10月2日～8日 バックフォアで西調査区の表土剥ぎを行なう。

10月9日 SK-1を掘削する。

10月11日～15日 東調査区の粗掘り、遺構検出を行なう。

10月16日 SK-2を掘削する。

10月17日～11月6日 西調査区を粗掘り、遺構検出を行なう。

この間、10月21日～25日 SK-4、SD-1・2を掘削し、記録する。

10月29日～11月6日 水田-1の一部、SD-4、SX-1を掘削し、記録する。

11月7日 高所作業車から第1検出面の完掘状況を全体撮影する。

11月8日 雨天のため写真測量中止。

11月9日～11日 水田-1の残り、SK-4を記録する。

11月12日 またもや雨天のため写真測量中止。

11月14・15日 SK-5、SD-5を掘削する。並行して写真測量の準備を行なう。

11月16日 ようやく第1検出面の写真測量を終了する。

11月18・19日 SK-5、SD-5を掘削する。

11月20～22日 水田-2、SX-3、SD-6を掘削する。

11月23日 バックフォアとダンプで排土を搬出する。

11月25・26日 東・西両調査区を粗掘り、遺構検出を行なう。

11月28・29日 水田-2を再度掘削する。

11月30日 バックフォアとダンプで排土を搬出する。

12月2日 西調査区西端、東調査区の一部を粗掘り、遺構検出を行なう。

12月3日 東調査区の調査完了する。

12月4日 水田-2を掘削し、記録する。西調査区西端を粗掘り、遺構検出を行なう。

12月6日 西調査区を粗掘り、遺構検出を行なう。

12月9日 西調査区の標高を計測する。

12月10日 P-4・5、SK-6を掘削し、記録する。

12月12日 第2検出面の標高を計測する。高所作業車から同面の完掘状況を全体撮影する。近隣地権者に終了の挨拶を行なう。器材の全てを撤収し、現地調査の全工程を終了する。

方 法 (第2図)

発掘調査

発掘調査は工事計画のうち、道路の車道と歩道工事の及ぶ箇所の1,600㎡を対象地とした。調査方法は、バックフォワーで表土と耕作土を除去した後に、人力で掘削し、精査・写真撮影・測量の順に行なう。

菊川町は国土座標系Ⅷ(中部東地域)の適用区域である。そこで町全域をこの座標系に沿った大小のグリッドで網の目状に覆っている。100m四方を一単位とする大グリッドとこれを10mごとに細分した小グリッドである。

大グリッドは、東西列を東から1・2・3ラインと数字で、南北列を北からア・イ・ウとカタカナで呼び、その交点にあたる北東コーナー杭を大グリッド名(大地区名)としている。例えば、今回の大グリッド名(大地区名)は、東からテ374、テ375である。

小グリッドは、杭の東西列を東から1・2・3ラインと数字で、南北列を北からA・B・Cラインとアルファベットで呼び、その交点にあたる北東コーナー杭を小グリッド名(小地区名)にする。たとえばG9区の具合である。グリッド基軸の方位はN-0°-Eで国土座標の真北に一致する。

G9・G10・H9・H10の4小地区は、テ374に属する。同様にその他の小地区はテ375に属する。

発掘区内は小グリッドの交点に測量用の基準杭を落とし、10m方眼のグリッドに区切る。主に小グリッドを基準に発掘調査を進める。

現地での作図は、20分の1の縮尺を原則とし、必要に応じ10分の1の縮尺で行なった。また、遺物の取り上げは、トレンチ・遺構面(ないし土層)・遺構・遺構内の土層毎に行なうことを基本とするが、精査中に遺物包含層から出土した遺物は、グリッド毎に取り上げた。しかし良好な残存状態を示す場合には、念のため出土位置を計測し、後日室内での作図・検証に備えた。

標高測量は、発掘区に隣接する路上にBM1(20.586m)を設定し基準点とした。調査に伴う写真撮影には、6×7cm判カメラ(白黒フィルム)と2台の35mm判カメラ(白黒フィルムとカラーリバーサルフィルム)を使用した。撮影は遺構を清掃したのち、高所作業車やヘリコプターで上空から撮影した。

整理調査

遺物の整理調査は、洗浄後、取り上げた袋(単位)毎に記番(マーキング)を行なう。記番は西軒遺跡の頭文字の「西」に今回の遺物取上番号(通し番号)である番号を記入する。遺物台帳と照合すれば、例えば「西1」の取上げた状況(出土年月日、出土単位、出土位置)が把握できる。

注記後は分類を行なう。種類は土器、石器・石製品、木製品、金属製品などに大別

しつつ、土器類は須恵器や土師器などに細別する。その内訳は取上番号ごとに遺物台帳に記録する。

接合や復元作業は、分類された種類ごとに行なう。接合はまず出土の最小単位内（すなわち取上番号内）で試みられる。さらに順を追って近隣箇所へと接合の対象を広げて行き、接合限界に達するまで行なう。必要に応じ石膏をもって補強・復元を行なう。

選別は接合が限界に達した時点で行なわれる。まず、分析対象としてのえり抜き遺物と資料化の対象からはずされる遺物（ボツ）とに2分する。えり抜かれた遺物は、定数分析に堪えられる部位（口縁部や底部）を主にし、報告書に図示される。

ボツ（没）の遺物はビニール袋に入れ、出土状況を記したエフで封じ収納する。

一方、詳細分析の対象に選び抜かれた遺物は、実測や写真撮影等の作業を経て、再度懇ろに復元作業される。

活用と保管

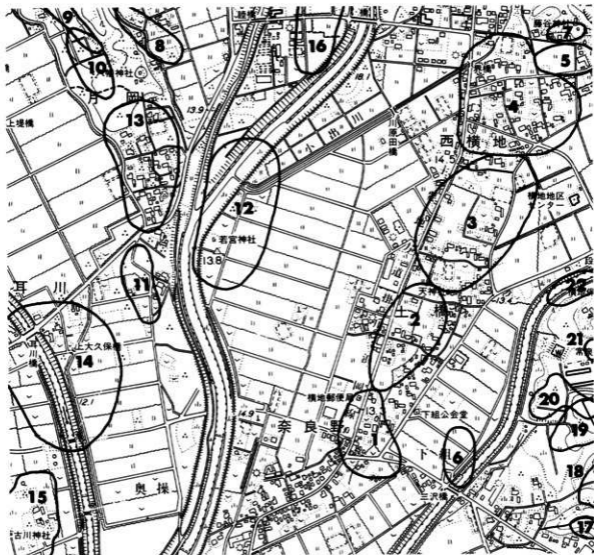
分析を経た遺物や図・写真等の記録は、報告書の刊行をもって公にされる。資料は展示、公開される機会を待って教育委員会で保管される。

第二章 地理的・歴史的環境

西軒遺跡は、JR東海菊川駅から南へ4.3kmに、東名高速道路の菊川インターチェンジから南へ2.6kmに位置する（第1・3図）。沖積地の自然堤防付近にあり、南北1.2km、東西0.8kmの広がりをもつ。北は横地郵便局の北から、南は県道掛川浜岡線が南西方向に大きく屈曲する付近に及ぶ。北から南に緩やかに下降する。県道上の現地表面は標高13.3mほどである。

番号	遺跡名	時代	位置	備考	番号	遺跡名	時代	位置	備考
1	西軒遺跡	弥生～江戸	土橋	平成7・8年度調査	12	若宮遺跡	弥生	加茂・西橋地	
2	土橋遺跡	弥生～中世	〃	平成8・9年度調査	13	月岡Ⅱ遺跡	古墳～江戸	月岡	
3	林光寺遺跡	弥生～江戸	〃	平成5・6・7年度調査	14	耳川遺跡	縄文～鎌倉	耳川	昭和59年度調査
4	御領所遺跡	弥生～江戸	西橋地		15	高田大塚敷遺跡	弥生～中世	下内田水落	昭和83・平成2・3・5年度調査
5	米山塚敷遺跡	弥生～江戸	西橋地		16	宮ノ西遺跡	中世	加茂	
6	寺塚敷遺跡	中世	東橋地		17	山王塚遺跡	縄文	三沢	
7	藤谷B横穴群	古墳	西橋地		18	前山遺跡	縄文	〃	
8	長池南遺跡	縄文～室町	加茂		19	久保之谷遺跡	縄文～中世	設橋地	平成5・6年度調査
9	原山遺跡	弥生	中内田		20	東橋地西原遺跡	縄文～平安	〃	昭和61年度調査
10	助九郎遺跡	弥生	月岡		21	御塚敷遺跡	縄文～平安	設橋地	昭和55年度調査
11	月岡Ⅰ遺跡	弥生	月岡		22	榎ヶ下遺跡	弥生～平安	設橋地	昭和48年度調査

第1表 周辺遺跡一覧表

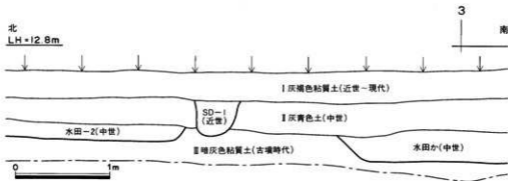


第3図 遺跡の位置と周辺遺跡(縮尺1:10,000)

今回の調査地点はこの中央に位置し、遺跡を東西に貫く調査区でいわばトレンチ状の長方形を呈する。東は沖積平野で水田面上で標高約12.3m、西は自然堤防上を現代にやや盛土していて標高約13.3mである。金山神社(かなやま)から北0.4kmに所在する。

北から南へ伸びる微高地は、古菊川と古牛淵川の氾濫原で堆積した自然堤防である(貝塚 1977、国土地理院 1982)。東は現代改修後の牛淵川がこの微高地の裾をかすめて南流する。西は菊川が南流する。

自然堤防上には、人家とそれを囲むように畑があり、南北に長く伸びる集落である。この裾の東西に広がる沖積地では水田が営まれている。今回の調査地点は、こうした



第4図 土層図(西調査区東壁 縮尺1:40)

自然堤防上とその東裾、ならびにさらに東に広がる水田の一面にあたる。東に広がる水田にある集落、下組(川島)は広義では今も東横地に含まれる。つまり西横地、土橋、奈良野3地区の古くからの集落はこの自然堤防上に中心があったと考えられる。

付近の遺跡分布を概観すると、つぎのようになる。

自然堤防上には、南から1西軒遺跡、2土橋遺跡、3林光寺遺跡、4御領所遺跡、5米山屋敷がある。弥生時代から江戸時代にわたる遺跡である。

東の段丘上に宇藤横穴とともに7藤谷B横穴群がある。ともに古墳時代の埋葬施設である。

牛淵川付近の沖積地には、22椎ヶ谷遺跡、6寺屋敷遺跡がある。

東対岸の段横地には、段丘上に古くは縄文時代まで遡る17山王裏遺跡、18前山遺跡、19久保之谷遺跡、20東横地西原遺跡、21御屋敷段遺跡が見られる。

西に目を移すと、菊川流域に古くは縄文時代にまで遡る8長池南遺跡がある。9原山遺跡、10助九郎遺跡、11月岡I遺跡、12若宮遺跡、13月岡II遺跡は弥生時代の遺跡である。小笠川付近には14耳川遺跡、15高田大屋敷遺跡がある。15は弥生時代～中世の遺跡といわれる。鎌倉幕府の地頭御家人内田氏宗家の居館跡と言われる(原1997)。

近年、2土橋遺跡では弥生時代・古墳時代・古代～中世の良好な遺跡の存在が確認された。今回で2度目にあたる1西軒遺跡の調査では、該期の土橋地区の歴史を知ろうと注目される。

第三章 調査の概要

第1節 層位(第4図)

基本層位は3層に識別された。I層は表土で現代の水田耕作土である。後述するII層より軟弱で、全体に茶樹の根が及んでいる。層厚は26～34cmである。本層上面は現

	土 坑	小穴・柱穴	溝	水田遺構	性格不明遺構
近 世	SK-4	P-1~3	SD-1・2		SX-1・2
中世～ 奈良時代	SK-1 ～3・5		SD-3~6	水田-1・2	SX-3
古墳時代	SK-6	P-4・5			

第2表 検出面別遺構名一覧表

代水田面である。

Ⅱ層は現代水田耕作土直下の土である。Ⅰ層に比べいくぶん硬く締まっていて、水稲の根はほとんど及んでいない。自然礫をほとんど含まない。層厚は22～37cmである。本層上面が近世の確認面である。

Ⅲ層は自然礫を含まない暗灰色粘質土である。層厚は22～38cmまで掘削したが、その下の層にあたるまで掘り抜かなかつた。本層上面が奈良時代から中世の遺構確認面である。当該期の遺構はこの層を掘り込む落ち込みとして確認された。土中に古墳時代の遺物を多量に含む。

古墳時代の遺構面は、Ⅲ層上面から20～30cm下に見られた。そこで、西調査区の西端の一部、すなわち自然堤防の微高地上に限定し、古墳時代の遺構面の調査を行なった。

各層とも上面は北から南になだらかに下降する。東西はつぎのとおりである。西調査区の西部が頂点で最も高い。東に急激に下降し、西調査区中央部が一旦谷部を呈する。そして東調査区に向かって緩やかに高まっていく。

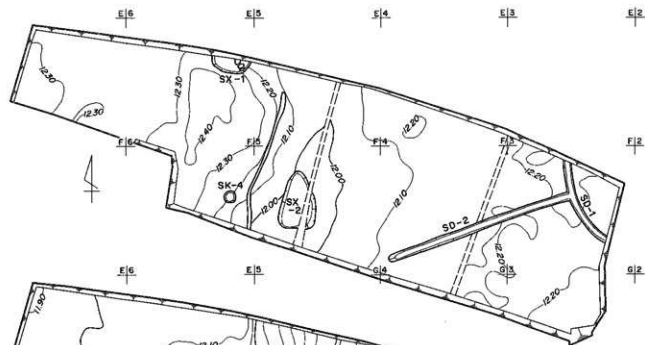
なお西調査区中央付近は、この基本層序と様相を異にする。淡灰青色または淡黄褐色砂礫土がⅢ層直下に見られ、遺構に伴わない平安時代中頃以降の遺物が含まれていた。旧菊川や牛湫川の氾濫によるものと考えられる。

第2節 遺構と遺物（第5図、第2表）

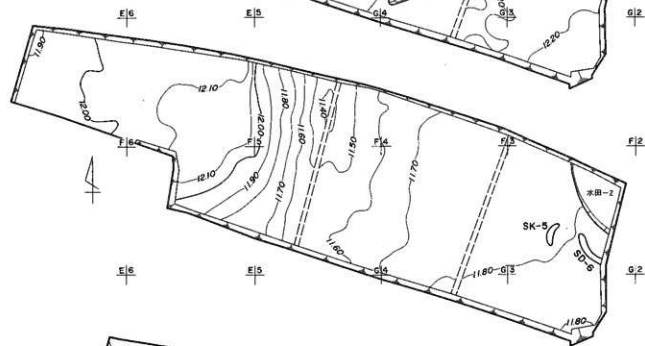
遺構

検出された遺構は、水田遺構2枚、溝（SD）6本、土坑（SK）6基、柱穴・小穴（P）5基、性格不明遺構（SX）3基である。遺物を伴った遺構を中心にふれる。

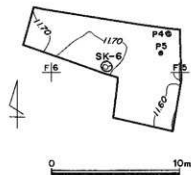
水田耕作等による現代の削平をほとんど受けておらず、全般に遺存状況は良好である。ほとんどの遺構に遺物を伴い、その年代や性格を判断する材料となった。時代は遺構に伴出した遺物と遺構埋土の特徴、そして周辺にある遺構との関連から推し量った。近世、中世～奈良時代、古墳時代と3つの遺構面が確認された。河川の氾濫によ



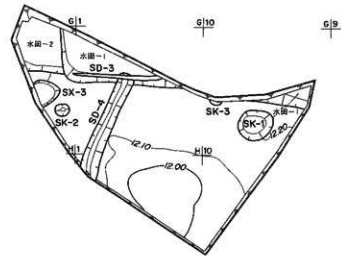
第1検出面全体図(近世)



第2検出面全体図(中世~奈良時代)

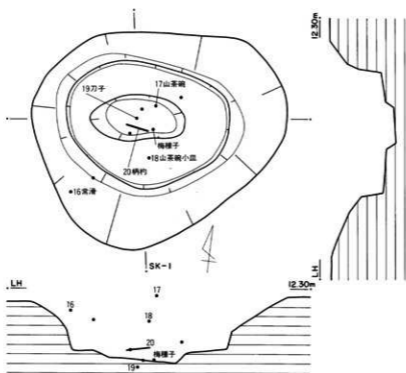
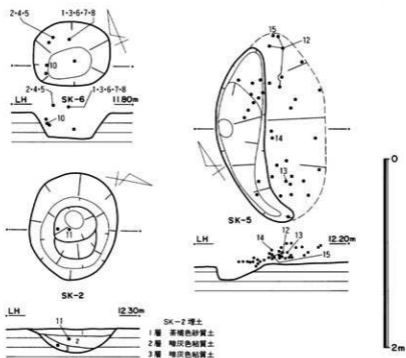


第3検出面全体図(古墳時代)



第5図 全体図(上:近世、中:中世~奈良時代、下:古墳時代 縮尺1:300)





第6図 SK-1・2・5・6実測図(縮尺1:40)

る自然堆積層がこれらを分かたが、古墳時代から現代まで、ほぼ継続して人の営みが行なわれた場所と考えられる。

地形

検出面の地形は2つの谷と2つの微高地からなる。1つの谷は西調査区のE4～F4区の間を抜け南南西方向に下降する。もう1つの谷は東調査区の南、H10区に南から入り込む。このため、地形は概ね両谷筋に向かって下降する。とりわけ、西調査区にある南流する谷は、鹿沼土大の小礫を含むなど、かつての河川の流れを推測させる。これに対し、この西の微高地は調査区中最も高い標高で自然堤防の地形を今も留めている。

遺物

ポリコンテナに16箱分の遺物が出土した。古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世の遺物である。種類は土器、陶磁器、瓦、金属製品、木製品である。土器類のほとんどが古墳時代から奈良時代の土器である。土師器が圧倒的に多く、ついで須恵器、山茶碗や灰釉陶器が見られる。瀬戸・美濃、常滑、渥美、志戸呂焼などの国産陶器も数点ずつ出土した。

古墳時代、奈良時代から中世、近世と時代順に分けて記述する。遺物は遺構に伴ったものは遺構の記述に添って、その他の遺物は、遺物包含層出土のものを中心に第3節で一括してふれる。器種分類と時期については既存の編年に拠ったが、明らかでないものは厳密にふれない。

古墳時代

SK-6（第6図左上、写真図版1下）

遺構 西調査区E5区に位置する。平面形が隅丸方形の土坑である。規模は長径0.82m、短径0.68m、深さ0.28mである。埋土は灰黄色土褐色土である。炭化物を多量に含む。年代は出土した遺物から古墳時代の中頃、6世紀後半と考えられる。

遺物（第8図1～10、第3表）

土師器の甕が多量に出土した。口縁部外面にヨコナデ、頸部から体部にかけてハケ目が見られる。10は底部内面にもハケ目が見られる。

奈良時代

SK-2（第6図左中、写真図版3下）

遺構 東調査区G1区に位置する。平面形が楕円形の土坑である。規模は長径1.14m、短径0.92m、深さ0.24mである。埋土は3層である。年代は遺物から判断して奈良時代と考えられる。

遺物 11が出土した。須恵器で箱型無高台の坏身である。

SK-5（第6図右上）

遺構 西調査区F2区に位置する。平面形が三日月形の土坑である。規模は長径1.88m、短径0.52m、深さ0.14mである。遺物の出土分布から判断すると実際の形態は楕円形であったと推測される。埋土は茶褐色灰色土で炭化物を少量含む。年代は出土遺物から奈良時代と考えられる。

遺物 12は須恵器で灯蓋、13は坏身、14・15は土師器甕である。いずれも8世紀と考えられる。

中世

SK-1 (第6図下、写真図版3上)

遺構 東調査区G9に位置する。平面形は上端は隅丸三角形、下端は楕円形である。規模は長径2.66m、短径2.28m、深さ0.66mである。埋土は暗灰色粘質土である。年代は出土遺物から中世と考えられる。

遺物 16～20が出土した。16は常滑の広口壺、18は山茶碗の小皿、17は壺、20は木製品である。19は刀子である。

16の器種分類と時期区分は常滑編年に拠る(赤羽・中野1994)。厚手の器壁と硬くよく締まった茶褐色の胎土が特徴で径0.5～3mmの白色粒子を含む。色は外面鉄軸で茶褐色である。施軸は外面は鉄軸で内面は自然軸である。時期は口縁部と口頸部の形態変化に基づく。

20は柄杓の柄と思われる部材である。断面長方形の細長い棒状で下端は残存しているが、上端は折れている。上部右側面に刻みがある。下部には正面裏面ともに敲打によると思われる凹みが集中している。柄杓ならば持ち手の部分と考えられる。部材は角材を一定の長さに切り取り、稜線を丁寧に面取りしている。柄の末端と思われる下端の四隅は丁寧に角が取られている。木目の細かい柾目材を用いている。

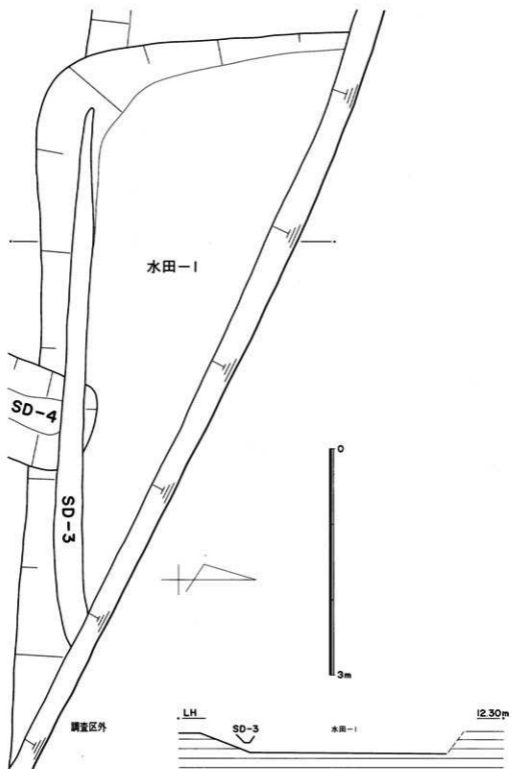
水田-1 (第7図、写真図版2上)

遺構 G9～10区北部に位置する。長方形の落ち込みである。規模は東西19.2m×南北4.2m、深さ0.31mである。埋土は2層で、第1層は茶褐色砂質土、第2層は暗灰色粘質土である。ともに自然露はほとんど見られない。年代は山茶碗から判断して12世紀後半、平安時代末～鎌倉時代初頭と思われる。

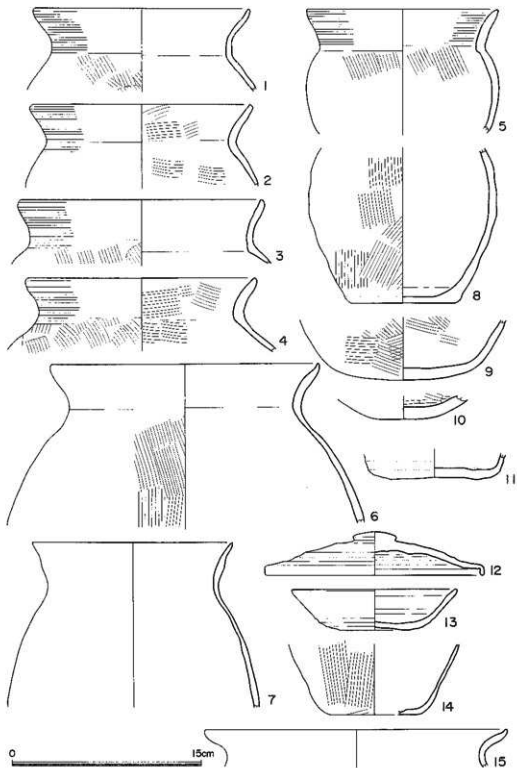
遺物 山茶碗(第9図17～29)

器種は碗、小皿、壺である。胎土の色調や粗さなどから産地の大別が可能とされるが、ここでは皿山古窯跡群の山茶碗編年(塚本1993)に沿って器形の特徴にふれ、(松井1993)に拠って時期を考察する。

碗 21～24である。大きさは口径が概ね15.5～18.2cm、器高5.9～9.2cmと法量に幅がある。29は断面方形もしくは台形の高台である。これに23・24は柶痕を高台に残す。色調は灰色から灰青色である。碗B-1類で山茶碗期Ⅱ期(12世紀後半)にあたりと思われる。21・22は断面形が細長い三角形の高台で、「ハ」の字状に外側へ張り出す。



第7図 水田-1 実測図 (縮尺 1 : 50)



第8圖 出土遺物1 (SK-6・2・5出土遺物)

21は口径15.5cmを測る。碗A-3類で山茶碗期Ⅱ期（12世紀後半）にあたると思われる。29は体部は内弯し、口縁部は外反せず直線的に開く。碗B-1類で山茶碗期Ⅱ期（12世紀後半）にあたると思われる。

小碗 25は大きさは口径9.8cmで器高2.7cmである。器形は、体部は少し内弯し、口縁部は少し外反し、器高は心持ち低い作りである。底部は回転糸切り未調整である。高台は粗雑でいくぶん低い断面三角形のものを有し圧痕は見られない。色調は淡灰色である。小碗A-2類で山茶碗期Ⅰ-2期（12世紀中頃）にあたると思われる。

水田-2（第5図中）

遺構 西調査区北東隅・F2区から東調査区の北西隅・G1区に位置する。調査区外で跡切れるが1つの遺構と思われる。深さ2～7cmで埋土は3層である。第1層は灰青色粘質土、第2層は茶褐色砂質土、第3層は暗灰色粘質土である。年代は出土遺物から判断して12～13世紀と思われる。

遺物

29は山茶碗の碗である。口径が18.0cm、器高5.1cmである。断面方形の高台で色調は灰色である。碗B-1類で山茶碗期Ⅱ期（12世紀後半）にあたると思われる。

近世

いずれも遺物がなく年代は定かでない。検出面の標高と検出時に付近で出土した陶器から当該期の遺構と考えられる。二つの遺構でT字形をなす。

SD-1（第5図上、写真図版1上）

遺構 西調査区F2区に位置する。水田-2に酷似した湾曲をもつ溝である。断面形は隅丸長方形である。規模は調査区内で長さ7.2m、幅0.3m、深さ0.31～0.43mである。埋土は暗茶褐色土である。遺物は本来水田-2に包含していたと思われる山茶碗が出土した。

SD-2（第5図上、写真図版1上）

遺構 西調査区F2～3区に位置する。直線的に伸びる溝である。断面形は隅丸長方形である。規模は長さ14.9m、幅0.3m、深さ0.23～0.44mである。埋土は茶褐色土である。

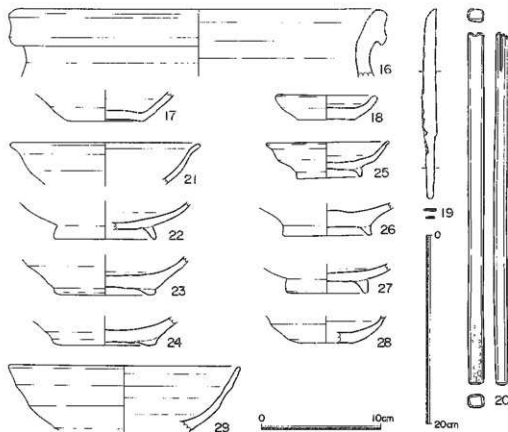
第3節 その他の出土遺物

遺物包含層出土の遺物を中心に、上述の遺構以外から出土した遺物を一括してふれる。詳細は巻末の遺物計測表を参照されたい。

古墳時代の遺物（第10～15図、第3～5表、写真図版4～6・8・9）

土師器 30～81である。器種は坏身、坏蓋、高坏、器台、壺、台付甕、甕、甌である。色調は橙々色である。共伴した須恵器から概ね6世紀後半の遺物と考えられる。

須恵器 器種分類と時期区分は遠考研編年に拠った（遠江考古学研究会 1966、川



第9図 出土遺物2 (SK-1、水田-1・2出土遺物)

江秀孝 1992)。90～109である。器種は坏身、坏蓋、高坏、広口壺、甕である。色調は灰色系である。坏身の立上がり短く、端部に整形の痕跡が見られない。概ね6世紀後半のものと考えられる。また一部に、立上がりが長く、端部内面に浅い沈線状のくぼみのめぐる坏身がある。6世紀中葉まで遡るものと考えられる。

109は外面に縄目の押き目、内面に同心円を刻んだ青海波文の当て具痕が見られる。2次焼成を受け黒くなった甕で、窯道具と思われる。

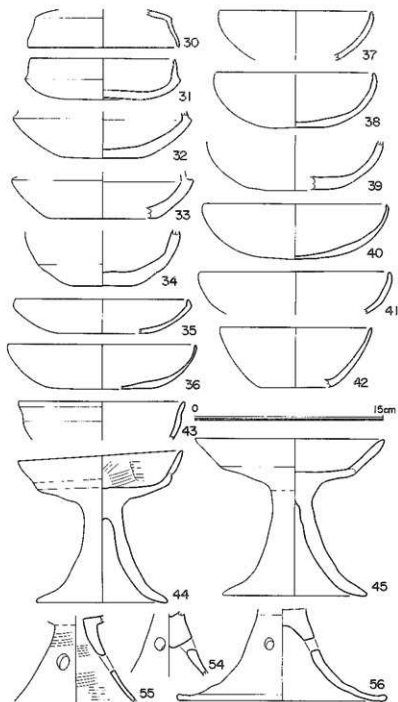
奈良時代の遺物 (第13図82・83、第15図110)

土師器 82・83は遠江型と呼ばれる甕である (佐野五十三 1996)。甕頸部内面に明確な突起状の繋ぎをもち肩部へと至る。奈良時代～平安時代前葉、すなわち8～9世紀のものと思われる。

須恵器 器種分類と時期区分は (八木勝行 1992) に拠った。110は坏蓋である。天井部がないが、擬宝珠つまみをもった坏蓋と考えられる。

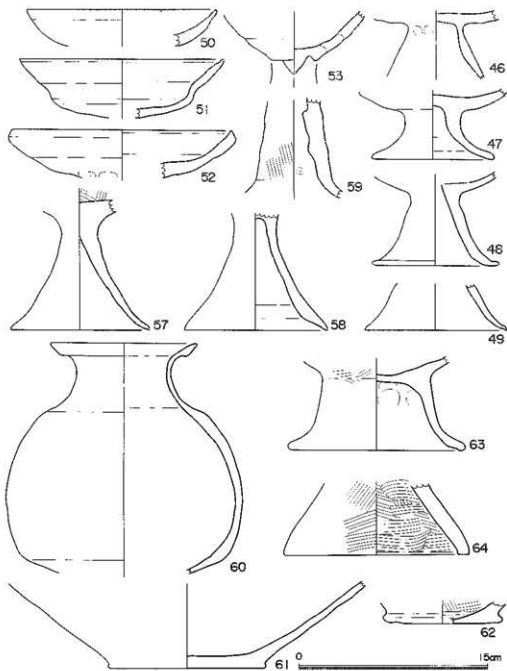
平安時代の遺物

灰釉陶器 (第15図111～115、第16図116・117、第5表、写真図版6下)



第10図 出土遺物3 (その他の出土遺物: 土師器)

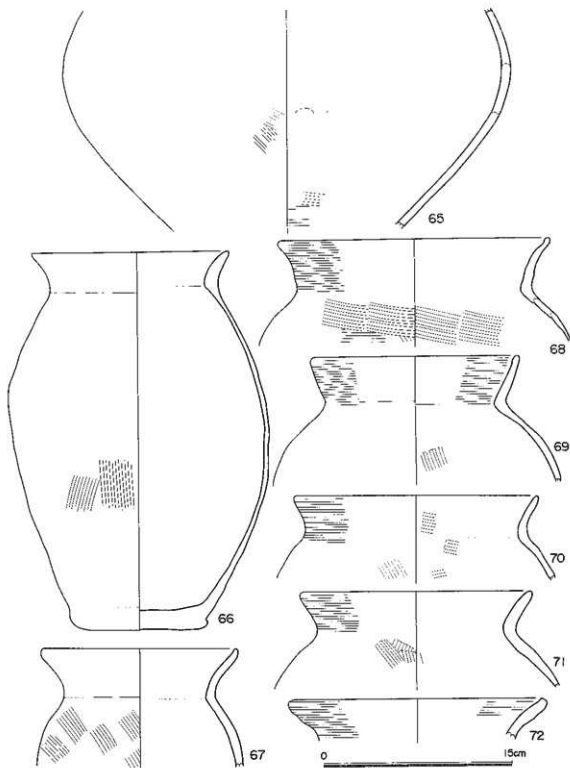
器種類と時期区分は斎藤孝正編年に拠った(斎藤孝正 1994)。111~115は碗である。111・112・114・115は丸味を帯びた高台で、底部は糸切痕を残す。深緑色の釉薬



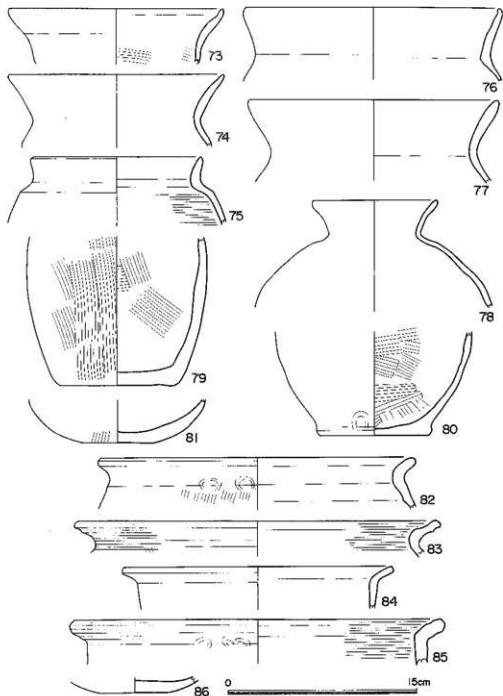
第11図 出土遺物4（その他の出土遺物：土師器）

の濱け掛けである。折戸53号窯式に比定される。113は細長い高台を有し、東山72号窯式に比定される。116・117は長頸瓶と思われる。いずれも概ね平安時代前葉から中葉のものと思われる。

土師器（第13図84～86、第4表、写真図版7下）

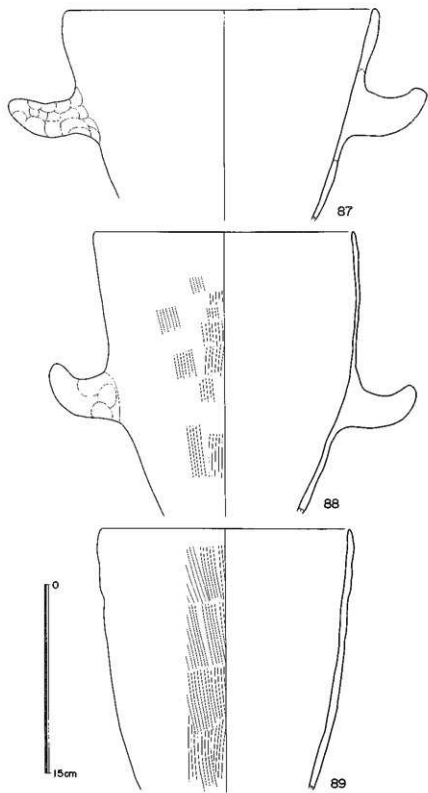


第12図 出土遺物5 (その他の出土遺物:土師器)

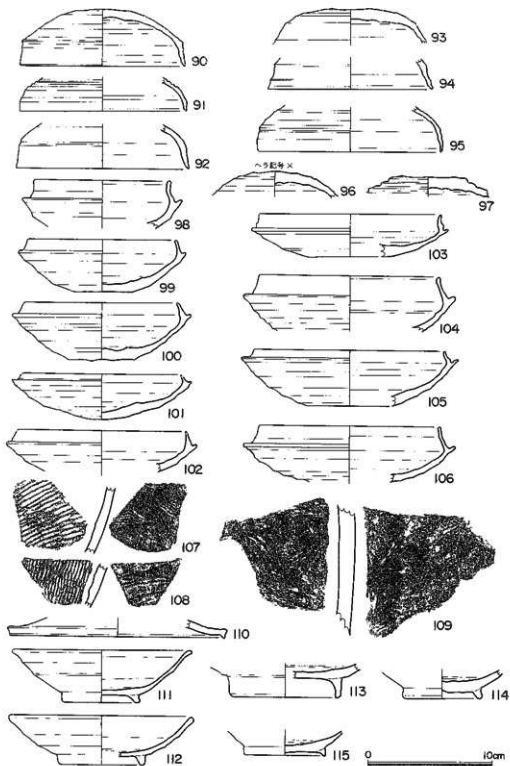


第13図 出土遺物6 (その他の出土遺物: 土師器)

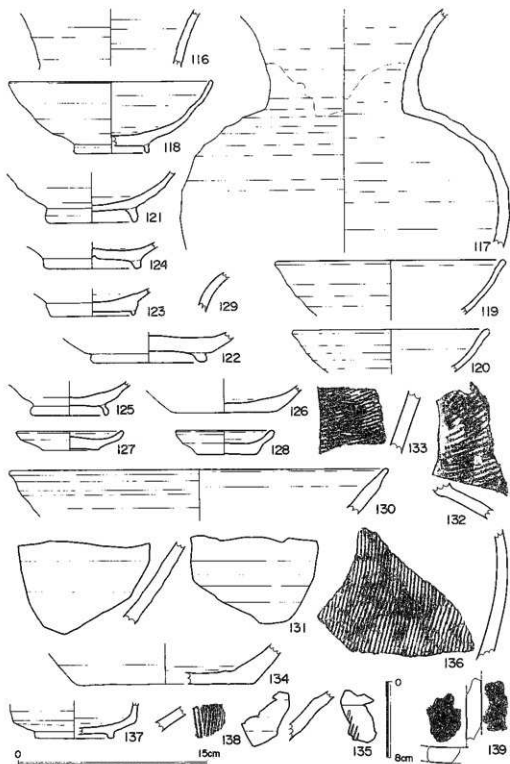
84~86は清郷型甕である。こげ茶色の胎土に多くの砂や白色粒子が含まれる。器壁は全体に肥厚で、外面にススが附着している。口縁部は頂部が突出し、断面が三角形



第14図 出土遺物7（その他の出土遺物：土師器）



第15図 出土遺物 8 (その他の出土遺物: 須恵器、灰釉陶器)



第16図 出土遺物9 (その他の出土遺物: 灰釉陶器、山茶碗、陶器、瓦は縮尺: 1/4)

をなす。調整は、口縁部は回転のナデで胴部にかけて指頭押圧痕が見られる。86は底部で丸底である。10世紀後半に出現し、11～12世紀中葉に普及したとされる（佐野五十三 1990）。

中世の遺物（第16図、第5表）

山茶碗（第16図118～128、第5表、写真図版6下・7上）

器種は碗、小皿、壺、瓶が見られる。概ね12～13世紀、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。

碗（第16図118～125） 大きさは口径が概ね15.5～18.2cm、器高5.9～9.2cmと法量に幅がある。122・124は断面方形もしくは台形の高台である。色調は灰色から灰青色である。碗B-1類で山茶碗期Ⅱ期（12世紀後半）にあたると思われる。121は断面形が細長い三角形の高台で、「ハ」の字状に外側へ張り出す。碗A-3類で山茶碗期Ⅱ期（12世紀後半）にあたると思われる。

118は口径は16cm、体部下半は直線的に外傾し、上半は内湾し、口縁部は緩やかに外反する。碗A-3類で山茶碗期Ⅱ期（12世紀後半）にあたると思われる。

小皿（第16図127・128） 平らな底部で著しく屈曲し体部から口縁部まで外傾する皿である。口径8cm前後で器高1.9cm以下である。底部は回転糸切り後未調整でやや台状をなす。色調は127が淡黄灰色、128が灰褐色である。127は底部と体部との境が明瞭で底部が台状のものである。小皿A-3類で山茶碗期Ⅲ期（13世紀中葉）にあたると思われる。

施釉陶器（第16図130～136、第5表、写真図版7中）

国産陶磁器で常滑、渥美、志戸呂焼、瀬戸・美濃の順に特徴的で分類が可能である。大別は（1）胎土の色、質（2）器壁の厚み、調整（3）釉薬の種類、色（4）器形をもとに行なった。

瀬戸・美濃（第16図135・136）

胎土が特徴的でやや軟かく、色は淡黄赤灰色系である。135は擂鉢である。釉薬はアズキ色の鉄釉で内面には擂目が見られる。136は甕である。調整は胴部外面に数本単位の叩目痕がある。

渥美（第16図130～134、第5表、写真図版7中）

器種分類と時期区分は常滑編年との並行関係から組まれた渥美編年に拠った（中野晴久1995）。器種は130・131は片口鉢、132～134は甕である。無施釉で山茶碗のような灰色や灰青色、あるいは淡灰色が特徴である。胎土には径1～5mmの白色粒子を含む。内面に自然釉のかかったものもある。130の体部は直線的な立上がりで口縁部外面に浅い沈線様のくぼみがある。1b型式で12世紀後半のものと考えられる。132は甕の肩部で押圧痕が、133は外面に叩き目、内面にヘラナデが見られる。

近世の遺物

志戸呂焼（第16図137・138、第5表、写真図版7中） 器種分類は志戸呂焼編年に拠る（足立順司 1990・1994）。胎土は硬くよく焼き締まり、灰色か灰茶褐色なのが特徴である。137は半筒茶碗と思われる。胎土は灰褐色で外面は鉄釉が施されている。138は橙々褐色の胎土の播鉢である。外面はサビ釉で茶褐色である。内面に播目が見られる。

瓦（第16図139、第5表）

E6から出土した。139は平瓦である。焼成は硬質で凹面凸面ともに平滑である。胎土は灰色で表面は暗灰色である。年代は近世以降と思われる。

第IV章 ま と め

今回の調査成果をまとめるとつぎのとおりである。

- 古墳時代、奈良時代、平安時代、中世をへて近世に至る複合遺跡であることが確認された。
- これらは旧菊川や牛淵川の氾濫で埋没し遺存したものと思われる。当時の川の流れと周辺的生活空間を考えるための資料を提供した。
- 西区東半分にある淡灰青色または淡黄褐色砂礫土層は旧菊川や牛淵川の氾濫による自然堆積層と考えられる。土質や含まれる遺物が対岸にある高田大屋敷遺跡と共通し注目に値する。
- 弥生時代後期の土器がわずかに出土したが、遺構に伴うものではない。該期の遺構面に達し、その存在を明らかにするには至らなかった。

なお調査の間と本稿をまとめるにあたり、下記の方々と関係機関から種々の御教示と協力を戴いた。末尾ながらここに記して御礼申し上げたい。

赤松 一秀	足立 順司	井村 広巳	大熊 茂広	佐藤 正知
鈴木 一有	鈴木 香織	瀬口 眞司	戸塚 和美	中村 智子
福井 貴義	宮城 義雄	村松 弘規	森井 雅彦	山崎 克巳

参 考 文 献

- 貝塚真平 1977 『日本の地形』岩波書店
- 国土地理院 1982 『1:25,000土地条件図 掛川』
- 原秀二郎 1997 『菊川町高田大屋敷遺跡問題』『地方史事典』弘文堂
- 菊川町教育委員会 1985 『三沢西原遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第4集
- “ 1993 『高田大屋敷遺跡』 “ 第25集
- “ 1996 『殿ヶ谷遺跡IV』 “ 第36集
- “ 1995 『潮海寺門前町遺跡』 “ 第39集
- “ 1996 『平成7年度文化財年報』菊川町文化財年報第3号
- “ 1994 『菊川町史跡・遺跡地図』
- 佐藤達雄 1992 「一 土師器の編年」『静岡県史』資料編3 考古3 P436~479
- 鈴木敏則 1985 「第6章 弥生時代古墳時代前期の土器」『三沢西原遺跡』菊川町埋蔵文化財調査報告書第4集
菊川町教育委員会 P34~68
- 中嶋郁夫 1997 『東海東部の古式土師器』『静岡県史研究』第13号 P23~45
- 辰巳 均・佐野五十三 1992 「一 土師器の編年」『静岡県史』資料編3 考古 三 P797~824
- 松井一明 1985 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』-板瓦遺跡序文・古墳時代編- 袋井市教育委員会
- 遠江考古学研究会 1966 『大沢・川尻古窯調査報告』
- 川江秀孝 1992 「二 須恵器の編年」『静岡県史』資料編3 考古3 P480~524
- 八木勝行 1992 「二 須恵器の編年」『静岡県史』資料編3 考古3 P825~853
- 佐野五十三 1996 『遠・駿・豆における古代の煮沸具』『第4回考古学フォーラム-鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 P269~274
- 佐野五十三 1990 『清郷型甕の研究-煮沸形態からみた古代末の東海地方-』『研究紀要Ⅲ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 斎藤孝正 1994 『東海地方の施軸陶器生産-猿投窯を中心に』『古代の土器研究-律令的土器様式の西東3』古代の土器研究会
- 松井一明 1983 『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学研究会』25 静岡県考古学会
- 塚本和弘 1994 『皿山古窯跡群の成立と終末について』『地域と考古学』
- 赤羽・中野 1994 『生産地における編年について』『中世常滑焼をおって資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 中野晴久 1995 「〔2〕常滑・瀬美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 足立順司 1994 『消費地出土の初山・志戸呂焼-原川遺跡を中心として-』『地域と考古学』
- 渡谷昌彦 1994 『志戸呂焼名品展』島田市博物館
- 金谷町町史編さん室 1991 『上志戸呂古窯跡発掘調査報告書』
- 向坂綱二 1992 「第5章 第1節 歴史時代の遺物概観」『静岡県史資料編3 考古3』
- “ 1992 「第5章 第2節 歴史時代の重要遺物 12 木製品」『静岡県史資料編3 考古3』

番号	器種	出土地点	法量 (cm)			登録No	備考
			口径	器高	底径か台径		
1	土師器 長胴甕	SK-6	16.8	(6.4)		671-1	6世紀
2	"	"	8.5	(6.5)		670-2	"
3	"	"	18.9	(5.0)		671-2	"
4	"	"	17.8	(5.7)		670-4	"
5	"	"	14.9	(9.7)	器径 15.2	670-1	"
6	"	"	21.0	(12.5)		671-5	"
7	"	"	15.6	(13.0)		671-3	"
8	"	"		(12.4)	器径 14.7	671-4	"
9	"	"		(5.0)	9.0	670-3	"
10	"	"		(1.9)	3.4	691	"
11	須恵器 坏身	SK-2		(2.1)	7.0	79	8世紀
12	須恵器 坏蓋	SK-5	17.0	3.5		127	"
13	須恵器 坏身	"	13.0	3.2	7.0	174	"
14	土師器 甕			(5.5)		170	"
15	"		23.8	(3.0)		345	"
16	常滑 広口壺	SK-1	28.0	(5.4)		12	13世紀
17	山茶碗 壺か			(2.2)	5.6	8	12~13
18	山茶碗 小皿		8.0	1.9	3.9	14	"
21	山茶碗 碗	水田-1	15.0	(3.3)		64	"
22	"			(3.0)	6.9	220	"
23	"			3.0	7.6	261	"
24	"			(2.4)	8.0	51	"
25	山茶碗 小碗		9.8	2.7	5.2	262	"
26	山茶碗 碗			(2.6)	7.0	222	"
27	"			(2.3)	6.4	276	"
28	山茶碗 壺か			(2.1)	5.6	249	"
29	山茶碗 碗	水田-2	18.0	(5.1)		413	"
30	土師器 坏蓋	G-10		(3.0)	器径 11.8	492	横俵坏
31	土師器 坏身	E-6	11.3	(3.2)	器径 12.2	621	"
32	"	G-9			器径 13.8	389	"
33	"	F-2			器径 14.2	541	"
34	土師器 坏	H-10		(4.4)		396	"
35	"	E-5	13.5	(2.7)	器径 13.9	640	"
36	"	E-6		3.5	器径 14.7	659-1	"
37	"	G-10		(3.9)	器径 12.2	505-2	"
38	"	G-2	12.4	4.4	器径 12.8	537	"
39	"	H-10		(3.9)		512	"
40	"	E-6	14.2	(4.4)	器径 14.6	628	"
41	"	G-10	14.8			505-1	"
42	土師器 坏か	SD-4	12.0	(4.7)		246	"
43	"	E-6	12.9	(3.0)		485	"
44	土師器 高坏	E-5	13.0	12.0		599	"
45	"	"	14.9	(12.4)		598	6世紀
46	"	G-10		(5.3)		78	7世紀
47	"	E-5		(5.5)	9.4	597	"
48	"	G-9		(7.4)	脚径 10.0	393	"
49	"	E-5		(3.7)	11.2	588	"
50	"	G-1				87	"
51	"	E-5	16.0	(4.7)		650	"
52	"	E-6	17.0	(3.7)		621	"
53	"	E-3		(5.0)		374	"
54	"	E-6		(4.9)		613	4世紀

第3表 遺物計測表1 (遺構出土の土器類、その他の遺物：土師器)

番号	器 種	出土地点	法 量 (cm)			登録 No.	備 考
			口 径	器 高	底径か台径		
55	土師器 器台	G-10		(6.7)		508	4世紀
56	土師器 高坏	F-5		(7.2)	脚径 16.5	634	"
57	"	E-5		(10.2)	脚径 11.0	596	
58	"	G-9		9.2	11.2	1	
59	"	G-1		(7.9)		192	
60	土師器 志	G-10	11.3	(18.1)		495	4世紀
61	"	E-5		(6.7)	12.0	684	
62	"	東区		(1.8)	9.4	3	
63	土師器 台付甕	G-10		(7.4)	脚径 14.0	497	
64	"	G-1		(5.6)	14.6	507	
65	台付甕か	F-5		(17.2)		638	
66	土師器 甕	E-5	15.4	29.9		675	
67	"	F-5	15.2	(9.3)		288	
68	"	E-5	21.0	(8.2)		597	砂粒多
69	"		16.0	(10.0)		653	
70	"		18.8	(6.7)		601	
71	"		17.8	(7.6)		674	
72	"	G-9	19.5	(3.3)		704	
73	"	東区	16.7	(4.3)		03	
74	"	E-5	16.8	(5.7)		640	
75	"	E-6	13.0	(5.3)		353	
76	"	東区	19.8	(5.8)		4	
77	"	G-9	19.4	(6.5)		14	
78	"	F-5	9.8	(8.5)		453	
79	"	"		(11.7)	8.8	455	
80	"	E-5		(8.2)		368	
81	"	H-10		(3.4)		570	
82	土師器 甕	西区	25.0	4.1		67	遼江型
83	"	F-4	28.0	3.1		551	"
84	"	E-6	21.0			354	清輝型
85	"	F-4	28.9	4.3		641	"
86	"	H-10		1.2	5.6	585	"
87	土師器 甕	F-5				352	
88	"	E-5				662	
89	"	G-10				496	
90	須恵器 坏蓋	E-6	13.0	4.5		629	6世紀
91	"	F-5	13.0	(2.7)		333	"
92	"	H-10	13.5	(3.5)		582	"
93	"	H-9		(2.7)		9	"
94	"	E-6	13.0	(2.5)		295	"
95	"	"	14.5	(3.5)		302	"
96	"	"		(2.1)		301	「×」
97	"	E-5		(1.6)		654	6世紀
98	須恵器 坏身	E-6	10.8	(3.7)	12.6	700	"
99	"	G・H-10	11.5	4.2	13.0	10	"
100	"	E-5	12.2	4.6	14.0	429	"
101	"	G-9	(12.3)	3.6	14.0	8	"
102	"	H-10	13.4	(3.2)	15.0	104	"
103	"	"	14.2	(3.4)	15.5	337	"
104	"	G-9	7.0	(4.4)	16.6	12	"
105	"		14.9	(4.4)	16.9	2	"
106	"	E-6	14.0	(4.3)	16.6	620	"

第4表 遺物計測表2 (その他の遺物: 土師器、須恵器)

番号	器 種	出土地点	法 量 (cm)			登録No	備 考
			口 径	器 高	底径か台径		
107	須恵器 広口壺か	西 区		(5.3)		46	
108		G-10・H-9		(3.4)		387	
109	須恵器 甕	G-9				390	二次焼
110	須恵器 坏蓋	F-2	17.0	(1.4)		535	8世紀
111	灰輪陶器 碗	F-4	14.2	4.2	6.0	156	10世前
112	"	E-6	13.0	3.9	6.6	422	"
113	"	E-3		(2.7)	8.8	556	10世後
114	"	F-4		(2.3)	6.3	555	10世前
115	"	水田-2		(2.0)	6.4	446	"
116	灰輪陶器 長頸瓶	E-6		(4.5)		420	
117	"	F-4		(18.8)		200	
118	山茶碗 碗	G-9	16.0	5.8	6.8	22	12~13
119	"	E-6	18.2	(4.3)		278	"
120	"	"	15.5	(3.4)		304	"
121	"	"		(4.0)	7.0	303	"
122	"	G-9		2.4	9.2	1-1	"
123	"	F-4		(2.1)	6.4	655	"
124	"	E-4		(2.1)	7.6	519	"
125	"	G-9		(2.6)	5.9	1-2	"
126	山茶碗 壺か	東 区		(2.2)	8.4	47	"
127	山茶碗 小皿	西 区	8.4	1.5	4.1	54	"
128	"	東 区	7.6	1.9	4.6	4	"
129	山茶碗 瓶か	E-6		(3.3)		297	"
130	渥 美 片口鉢	E-3	30.0	(3.6)		153	12世後
131	"	G-9		(6.5)		1-1	"
132	渥 美 甕	E-6				423	"
133	"	G-9				1-2	"
134	"	F-2			14.0	143	"
135	瀬 戸 搦鉢	E-5		(3.8)		217	"
136	瀬 戸 甕か	F-2		(10.2)		184	"
137	志戸呂 半筒茶碗	E-6		2.8	6.2	296	18世紀
138	志戸呂 搦鉢	G・H-10		(2.0)		95	"

番号	種 類	出土地点	厚 さ (cm)	色 調		登録No
				表 面	内 部	
139	平 瓦	E-6	1.6	暗灰色	灰 色	227

番号	器 種	出土地点	法 量 (cm)			重 さ (g)	素 材	登録No	備 考
			長 さ	幅	厚 さ				
19	刃 子	SK-1	20.2	1.4	0.1~0.2	20.0	鉄	55	12~13

番号	種 類	出土地点	法 量 (cm)			登録No	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
20	柄杓か	SK-1	38.3	1.7	1.4	38	12~13

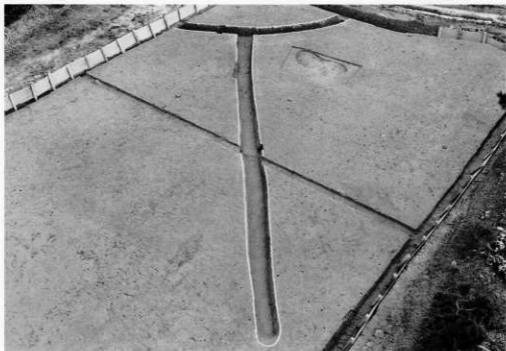
第5表 遺物計測表3 (その他の遺物: 土器類、遺構出土の遺物: 金属製品、木製品)

西軒遺跡発掘調査報告書

1997年12月26日 発行

編 集 静岡県菊川町教育委員会
発 行 静岡県菊川町教育委員会
印 刷 株式会社 開 明 堂

写 真 图 版



西区第1面完掘状態（南西から）



SK-6完掘状態（南から）



東区完掘状態（南から）



SD-4土層断面（北から）



SK-1 完掘状態 (南から)



SK-2 完掘状態 (西から)

写真図版 4



出土遺物（土師器 坏）

38	41	32
	37	34
40	36	
35	30	39
◇	◇ 43	33



出土遺物（土師器 高坏）

52	53	51
50	◇	54 46
57	58	55 59



出土遺物（土師器 手前：高坏，奥左から甗、甗）

88	66
44	45

写真図版 5



出土遺物 (土師器 甕)

7	6	2
3		4
1	5	70



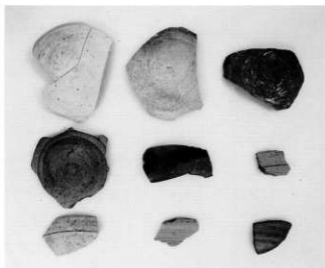
出土遺物 (土師器 甕)

69	77	73
	76	◇
	74	
67	15	78



出土遺物 (土師器 甗、台付甕、甕、壺)

89	65	64
	◇	49
10	14	62
9	81	80 61



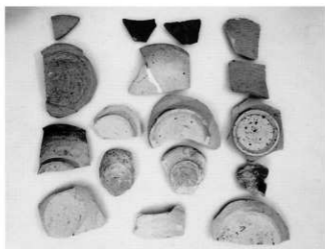
出土遺物 (須恵器 坏蓋)

93	◇	96
97	92	94
95	91	◇



出土遺物 (須恵器 坏身)

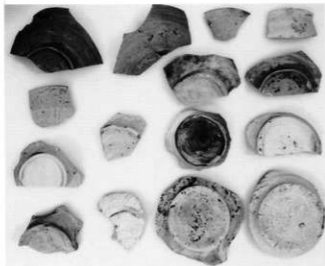
99	◇	101
106	105	102
		104
◇	98	103



出土遺物 (須恵器、灰釉陶器、山茶碗類)

110	108	107
11	13	116
	115	113 114
112 18		127 129
17	28	126

写真図版 7



出土遺物 (山茶碗 碗)

118	29	120	21
119		121	22
125	27	123	124
26	122	23	24



出土遺物 (瀬戸・美濃、常滑、渥美、志戸呂焼、瓦)

135	16	138
	136	133 137
132	130	
134	131	139



出土遺物 (刀子、土師器 坏、甕、清郷型甕、須恵器 甕)

83	19	
82	42	85 84
75		
◇	109	86



90



48



100



56



31



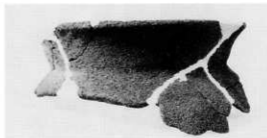
60



47

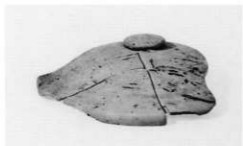


63



68

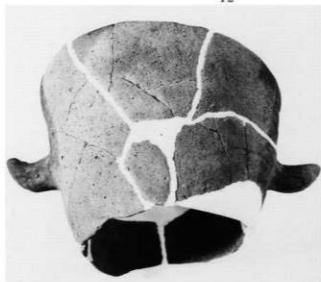
出土遺物 (土師器、須恵器)



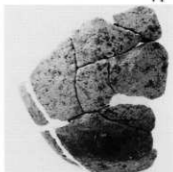
12



71



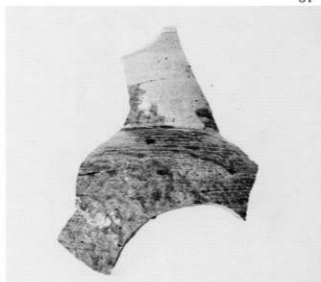
87



8



79



117



111



25



128